

上原 美術館 通信

No.
31

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2025年9月18日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



小説『伊豆の踊子』の著者川端康成は、紀行『伊豆の旅』の冒頭で「伊豆は南国の模型」「伊豆は海山のあらゆる風景の画廊」と書きました。白砂の浜、奇岩が浮かぶ磯、断崖絶壁が続く入り組んだ海岸線とそこに営まれた小さな港町、山々に抱かれた集落、河川が開いた小平野、火山の恵みの温泉…地区ごとに異なった顔を見せる伊豆は、「美しさの変化」が半島のなかに満ちていて、さながら多彩な地形を集めた模型のようです。伊豆は小世界が集まって構成されていると言えますが、それぞれの世界には、その地に生きた人々が信仰した仏像が大切に守り伝えられています。本展ではこのような伊豆に伝えられた仏像のうち、平安時代から鎌倉時代に造像されたものを中心に二十数体を厳選して展示いたします。



十一面観音像(平安時代・11世紀) 南伊豆町・海蔵寺



十一面観音像 頭部

伊豆最南端、南伊豆町入間地区の海蔵寺に伝わる十一面観音像は、像高105cm。頭の鉢の天冠台にならぶ頭上面と両手首先、垂下する天衣は別材製ですが、頂上仏面から両腕両足先を含む像の主要部分を榿の一材からつく

くの一木造りの像です。この構造は、天衣が下半身の背面をU字型に渡る表現とともに古様ですが、浅い衣文、薄い体軀、穏やかな面貌などは平安時代後期の特徴。古風な構造や表現は、中央から離れた地ゆえに古い要素が残存したものと

思われ、実際の年代は11世紀と考えられます。本像は昭和61(1986)年、当館の調査により見出されましたが、その後、厳重に厨子に納められ、長らく姿を見ることができなくなっていました。寺族、檀家、地域の皆さんの特別なご厚意により、今回、寺外での初公開が実現した特別な仏像です。海蔵寺像とほぼ同じ大きさなのが、河津町沢田地区、林際寺の観音菩薩像です。大きさはよく似ていますが、腰が引き締まり、肉のひだをあらわす表現、深い衣文、丸々と量感を感じさせる体軀など、印象はだいぶ異なり、こちらは10世紀の像でしょう。さらに古いのが、河津町下峰地区、善光庵の十一面観音像(静岡県指定有形文化財)です。海蔵寺像と同じ十一面観音像ですが、量感に満ちた威風堂々とした造形は圧倒的で、10世紀初めの像と考えられます。本展ではこの3体の像を比較しながらご覧いただけます。



観音菩薩像(平安時代・10世紀) 河津町・林際寺



十一面観音像(平安時代・10世紀) 河津町・善光庵 静岡県指定有形文化財

伊豆最南端、南伊豆町入間地区の海蔵寺に伝わる十一面観音像は、像高105cm。頭の鉢の天冠台にならぶ頭上面と両手首先、垂下する天衣は別材製ですが、頂上仏面から両腕両足先を含む像の主要部分を榿の一材からつく

松崎町那賀地区、西法寺の阿弥陀三尊像と二天像(松崎町指定文化財)は、平成23(2011)年秋の当館での展示以来、久々に寺外での公開が実現した仏像です。制作年代は平安時代後期の12世紀後半。阿弥陀三尊像は阿弥陀如来の左右に観音菩薩と勢至菩薩を配するのが通例ですが、本像は勢至菩薩が地藏菩薩に代わっているのが特徴。このような阿弥陀三尊像は異例で、全国を見渡しても十数例しか確認されていませんが、松崎には本像のほかに、同じ構成をとる鎌倉時代前期の吉田寺阿弥陀三尊像(静岡県指定有形文化財)があります。本展では西法寺像と吉田寺像をあわせて展示します。



阿弥陀三尊像(平安時代・12世紀) 松崎町・西法寺 松崎町指定文化財



二天像(阿形、平安時代・12世紀) 松崎町・西法寺 松崎町指定文化財

西伊豆町宇久須地区、明泉寺の薬師如来像と、伊豆市市山地区、明徳寺の観音菩薩像(表紙写真)は、平成4(1992)年にMOA美術館で開催された特別展『伊豆国の遺宝』に出展さ

れて以来、30年ぶりの寺外公開が実現した仏像です。明泉寺像は満月のような丸顔に瞑想するような穏やかな面貌、流麗な衣文が印象的な像で、伝来を知らなければ、伊豆の仏像とは思えないほど、都ぶりを感じさせる美しい仏像です。頭部は5つの材、体部は前後左右に4材を寄せて作る寄木造りで、頭部と体部の構造の違いなどから、従来、何らかの事情で平安時代後期の頭部だけが残ったものに、鎌倉時代、体部を補ったものと考えられてきました。

明徳寺の観音菩薩像(伊豆市指定文化財)は、修禪寺本尊の大日如来像と並び、伊豆中央部を代表する鎌倉時代の仏像。失われた両腕やうねる天衣を補い、面部に新たに漆箔を押しつけているものの保存状態は良好で、慶派仏師の作例と考えられています。

松崎町岩科地区の浄土宗寺院、天然寺の地藏菩薩像(松崎町指定文化財)は、縁あってこの寺に奉納された仏像。かつてどこに伝えられたものなのかは残念ながら知ることはできませんが、鎌倉時代の仏像として注目すべき作例です。本像は本展が寺外初公開となります。

本展では、通常拝観が難しい仏像をご住職や檀家の皆様、管理されている地域の皆様の特別なご厚意により、展示させていただきました。伊豆各地から集まったみほとけとの一期一会の出会い。是非ご覧ください。(田島)



地藏菩薩像(鎌倉時代) 松崎町・天然寺 松崎町指定文化財



銅造阿弥陀如来像(鎌倉時代) 伊東市・浄円寺



アルフレッド・シスレー 《秋風景》1880年

小高い丘から見下ろすパリ郊外のシャンパーニュ平原にセーヌ川がゆったりと流れています。草木が生い茂る小道からは、静かな自然に分け入る葉擦れの音さえ聞こえるかのようです。鋭く伸びる枝の向こうには高い空が広がり、紫色に霞む遠くの大地に爽やかな風が吹き抜けます。印象派の画家アルフレッド・シスレーが描いたこの油彩画は、フランス語の原題に「ロッシュ＝クルトーの丘から見たシャンパーニュ平原」と付けられていますが、一方で日本語のタイトルは「秋風景」となっています。そのわずかな言葉の響きには作品の叙情性が秘められており、この絵を愛した国内のコレクターのちいさなまなざしが垣間見えるかのようです。眼の前の自然の変化をとらえようとする印象派のまなざしは、どこか移ろう季節を愛でる日本人の自然観と共通する感性が息づいています。

印象派の中でも徹底して移ろいゆく光を捉えようとしたのはモネでした。《雪中の家とコルサース山》はモネが50代の冬、北欧ノルウェーで描いた作品です。モネは380メートルほどのこの雪山を富士山に見立て、悪天候や霧、夕暮れな



クロード・モネ 《雪中の家とコルサース山》1895年

ど、変化する光の中で幾つもの油彩画に描きました。それら連作はモネ自身が収集していた葛飾北斎の浮世絵、富岳三十六景を彷彿とさせ

ます。そうしたシリーズの一つである本作をモネから直接購入したのは、大正時代に金融調査のために渡仏した黒木三次・竹子夫妻でした。黒木夫妻は日本

びいきのモネと親しく交流し、1919(大正8)年、ジヴェルニーのモネ邸にて直接この作品を譲り受けました(参考写真)。帰国後、黒木氏は国内の展覧会に出品、岸田劉生をはじめ多くの画家がこの絵を目にします。その後、関西のコレクター和田久左衛門の所蔵を経て、2005(平成17)年に上原美術館に収められました。日本に憧れたモネのまなざしは、移ろう自然を愛でる日本のコレクターのまなざしと重なり、今では富士山の近くの伊豆に飾られています。

本展ではコレクターや鑑賞者、画家自身の「ちいさなまなざし」をキーワードに印象派の絵画をご紹介します。若きルノワールがモネと並んで描いた《アルジャントゥイユの橋》、セザンヌがパトロンのガシェ医師のアトリエで試行錯誤して取り組んだ静物画《ウルピノ壺のある静物》、農村を愛したピサロがリング畑を描いた《エラニーの牧場》など、上原コレクションより印象派の絵画をどうぞお楽しみください。(土森)



参考写真:《雪中の家とコルサース山》と記念撮影する黒木竹子夫人、モネとその家族、1919(大正8)年、黒木三次撮影



ポール・セザンヌ 《ウルピノ壺のある静物》1872-73年



カミーユ・ピサロ 《エラニーの牧場》1885年

セーヌ川のみなにも風が吹き抜けます。橋の上を走る汽車は煙を吐きながら左へと進み、間もなくアルジャントゥイユの駅に到着します。アルジャントゥイユはパリから汽車でおよそ20分。当時、パリの人々の多くが週末になるとここを訪れて川遊びをしました。当時、アルジャントゥイユ駅のすぐ近くに住んでいたのがモネでした。この絵が描かれたのは、モネの家から250メートルほど歩いたセーヌ川のほとり。32歳のルノワールはこの頃、度々モネの家を訪ねて、ともに同じ風景を描きました。二人が描くそれらの絵画は、どこまでも自由で伸びやかな感性に満ちています。ルノワール《アルジャントゥイユの橋》のみなにもには白の絵具がそのまま置かれており、その生々しさが今にも見るものにセーヌの風を届けるようです。なぜ二人はここまで自由な絵画を描くに至ったのか。その秘密はこの鉄道橋に隠されています。

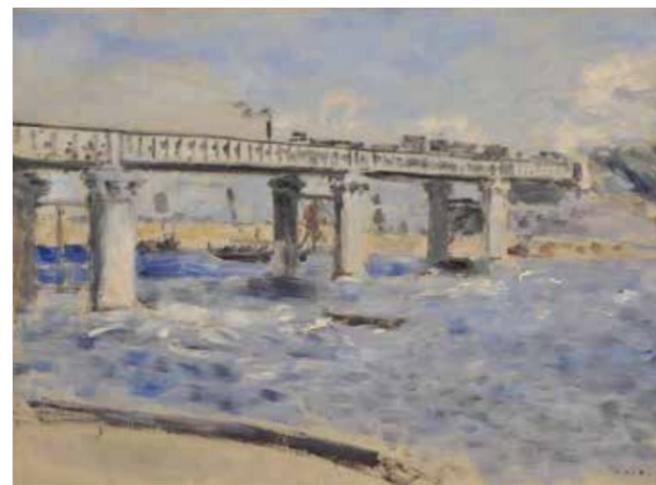
モネとルノワールは20代後半から戸外の明るい光を見えるままに描こうと模索しました。しかし、当時は屋内で

丁寧に絵を仕上げる時代。彼らの挑戦は世間にはなかなか受け入れられませんが、そうした中で勃発したのが普法戦争です。ルノワール29歳の1870年7月、フランスとプロイセンの間で戦争が勃発します。それまでパリのカフェに集っていた仲間は戦争によって引き裂かれました。ルノワールはポルドーの騎兵部隊に配属、モネは戦禍を避けてロンドンへ渡り、その後、オランダに滞在します。二人の親友であったバジールはオルレアン近郊で戦死しました。戦乱の最中、フランス軍は撤退中に自らアルジャントゥイユの鉄道橋を破壊します。結局、フランスはプロイセンに大敗。その後、パリに自治政府が設立されパリ・コミューンの混乱が起きます。戦乱が落ち着き、モネがアルジャントゥイユに居を構えたのは1871年末のことでした。モネがアルジャントゥイユに入るとき、鉄道橋はまだ修復中で、人々は隣に架かる歩道橋を渡っていました。

終戦後、ナポレオン3世による第二帝政も終わりを遂げ、人々の価値観は変わり、新しい時代が始まります。30

代になったばかりのモネとルノワールはもはや自らが模索する表現への迷いはなかったのかもしれませんが。二人はアルジャントゥイユとともに屋外制作を重ね、次々と自由な感性による絵画を生み出しました。

1873年にルノワールとモネが描いたのはまさに再建されたばかりの鉄道橋です。セーヌ川のきらめきの上に架かる鉄道橋は新しい時代への希望が込められているようにも見えます。二人がこれらの絵を描いた翌年、モネやルノワール、ピサロらは「画家、彫刻家、版画家などの芸術家による共同出資会社の展覧会」を開催します。1ヶ月で3,500名ほどの入場者でしたが、それらの新しい絵は人々に驚きを与えます。完成したようには見えず、印象でしかないと感じた批評家は、彼らを「印象派」と呼びました。そして、モネやルノワールはいつしか新しい時代の価値観を表現する「印象派の画家」として知られることとなります。アルジャントゥイユの鉄道橋を見つめる二人のまなざしは新しい時代の自由な感性と希望に満ちています。



ビエール＝オーギュスト・ルノワール 《アルジャントゥイユの橋》1873年、上原美術館蔵



クロード・モネ 《アルジャントゥイユの鉄道橋》1873年、個人蔵
画像出典: Christie's New York, Impressionist and Modern Art, Evening Sale, Tuesday 6 May 2008, Christie's, New York, 2008, no.21.



破壊されたアルジャントゥイユの鉄道橋、1870-71年頃
画像出典: Paul Hayes Tucker, Monet at Argenteuil, Yale University Press, New Haven and London, 1982, p.75.

ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、学芸員が解説を行いました。
 展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催
 しております。
 開催時間になりましたら、各展示室へお集まりください。
 ※要入館券、詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。

調査活動

6月18日 函南町・寺院調査

授業入館

7月3日 河津町立河津中学校職場体験受け入れ
 7月18日 誠恵高等学校

河津中学校は生徒1名の職場体験の受け入れを行い、主に学芸員の仕事につ
 いて体験しました。

出張授業

7月11日 静岡県立伊豆中央高等学校
 7月17日 静岡文化芸術大学

伊豆中央高校では、キャリア教育イベントの講師で学芸員の仕事について田
 島上席学芸員がお話しました。静岡文化芸術大学では土森上席学芸員が博物
 館学で講座を行いました。

博物館実習

8月4日～8月8日
 学芸員資格取得を目指す学生を対象に博物館実習の受け入れを行いました。
 本年度の参加者は8名で、初日は当館の企画展の作り方や、地域に根ざした
 教育普及活動など座学が中心となりました。

2日目は仏教館のバックヤードの見学、古美術作品の取り扱いを実際の作品
 を使って体験しました。また江戸～明治時代に描かれた掛軸作品を使った
 即興のギャラリートークを行い、各実習生はそれぞれの作品の見どころを
 紹介しました。

3日目は当館で取り組む文化財保護のあり方を座学で紹介後、河津平安の仏
 像展示館にお邪魔して、文化財保護の実情や現地の方からお話をうかがい
 ました。

4日目は近代館のバックヤードや収蔵庫の見学、また額作品の取り扱いを行
 いました。取り扱いにはコミュニケーションが重要になることから、実習生
 同士で声をかけあって作品を取り扱いました。

5日目の最終日は、実際の収蔵品から数点を選び、空間や展示方法を工夫し
 た模擬展示を行いました。2グループに分かれて行った最終日は、各グルー
 プともに個性的な展示内容となりました。



ギャラリートーク



職場体験の様子



出張授業の様子



博物館実習の様子

「ピカピカ金の箔でお絵描き！—砂子編—」

7月21日(月・祝) 当館アトリエ 講師：牧野伸英先生(日本画家/当館日本画教室講師)

夏のワークショップ第1弾として、親子向けの「ピカピカ金の箔でお絵描き！—砂子編—」を開催しました。ワークショップでは、日本の伝統技法である砂子を体験いただきました。金の箔を細かい粉状にして絵の上にふりかけることで、きらめく装飾を施す技法です。金の箔をふりかける瞬間には、「わあ！きれい！」と、歓声があがる場面も見られました。当日は、5歳から11歳までのお子さまとその保護者、あわせて9組24名が参加。親子で協力しながら、思い思いの作品づくりに取り組む姿が見られ、終始なごやかな雰囲気のなかでワークショップを楽しんでいただきました。

「初心者のためのデッサン教室」

8月19日(火)～8月21日(木) 計3日間 当館アトリエ 講師：小野憲一先生(現代美術作家/当館デッサン・水彩画教室講師)

8月19日から21日の3日間、小学5年生から高校生までを対象に「初心者のためのデッサン教室」を開催しました。初日は画材の扱い方やイーゼルの立て方など基礎を丁寧学び、2日目と3日目は紙コップや石膏のデッサンに挑戦いただきました。参加者は10歳から17歳までの9名。それぞれのペースで集中して取り組む姿が印象的でした。今回の体験がものづくりへの興味や表現力を深めるきっかけとなれば幸いです。

「親子でいるあそび いろの世界をのぞいてみよう！—透明水彩による三原色を用いた色作りの入門編」

8月23日(土) 当館アトリエ 講師：小野憲一(現代美術作家/当館デッサン・水彩画教室講師)

8月23日は親子向けのワークショップ「いろの世界をのぞいてみよう—透明水彩による三原色を用いた色作りの入門編」を開催しました。このワークショップでは、赤・青・黄の三原色を使って、さまざまな色を自分の手でつくる体験をしていただきました。同じ色を混ぜても、混ぜ方や水の量、重ね方によって仕上がりはさまざま。親子でつくった色を楽しそうに見せ合う姿が見られました。だれひとりとして同じ色をつくることはなく、参加者20名一人ひとりが、それぞれのいろの世界を自由に表現していました。

出張ワークショップ

7月12日 「岩絵具を使ってキラキラな絵を描いてみよう！」伊東市立伊東図書館
 7月28日 「世界にひとつだけの額縁をつくろう！」東伊豆町立図書館
 7月31日 「はじめての日本画教室」伊豆の国市野外活動センター(茅野っ子ひろば)
 今回は外部からのご依頼で3つの出張ワークショップを行いました。



ピカピカ金の箔でお絵描き！



初心者のためのデッサン教室



親子でいるあそびいろの世界をのぞいてみよう！

伊豆だより



松崎海岸花火大会

今年の梅雨は短く、美術館のある下田の山間も夏の厳しい日差しが降り注いでいました。伊豆各地の海は、花火大会や海水浴のお客さんで賑わい、夏の伊豆らしい風景が見られました。

さて、今夏も美術館は学芸員資格の取得を目指す学生を対象に博物館実習の受け入れを行いました。さまざまな作品や、文化財を直接見る機会がある実習が、さらに美術へ興味を持つようなきっかけとなればと思います。

美術館はこれから秋の特別展の時期を迎えます。仏教館は伊豆各地の仏像をご紹介します『伊豆のみほとけ』、近代館は当館コレクションの人気の印象派をご覧いただける『印象派をたのしむ』です。秋が深まる伊豆で美術鑑賞をお楽しみください。

(櫻井)

おすすめの展覧会



オディロン・ルドン
《ブリュンヒルデ、神々のたそがれ》1894年

オディロン・ルドン 夢の交叉 ―画家として、批評家として― ヤマザキマザック美術館

2025年10月24日(金)～2026年2月23日(月)

愛知県名古屋市にあるヤマザキマザック美術館は、18世紀から20世紀のフランス絵画をはじめ、アール・ヌーヴォーのガラス工芸品や家具のコレクションが魅力の美術館です。このたび、ヤマザキマザック美術館では、展覧会『オディロン・ルドン 夢の交叉 ―画家として、批評家として―』が開催されます。本展では、19世紀のフランス絵画の巨匠、オディロン・ルドン(1840-1916年)の精選された名品をはじめ、ルドンが著書『私自身に(A soi-même)』の中で評論したアングル、ピサロ、ドガ、ロダン、ボナールら芸術家たちの作品がルドンの言葉とともに展示されます。他の作家たちを見つけるルドンの視点から、彼の美学や芸術観、制作姿勢を読み解きます。本展にはルドン《光のプロフィール》(1886年)、《ブリュンヒルデ、神々のたそがれ》(1894年)の2点が当館から出品されます。ぜひこの機会にルドンの芸術をご堪能いただければ幸いです。

(土屋)

次回休館日は2026年1月13日(火)～1月23日(金)です。(展示替えのため)



上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間
9:30～16:30
最終入館は16:00まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人/1,000円、学生/500円
高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引

表紙写真：伊豆市市山・明徳寺の観音菩薩像(鎌倉時代/伊豆市指定文化財)。写実的な造形をご覧ください。